

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	血の絃（つづき）：新体詩：文苑
Author(s)	江中，紫秋
Citation	龍南會雜誌， 1 2 8： 2 7 - 2 8
Issue date	1908-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6177
Right	

血の絞 (つづみ)

江中紫秋

四、張子の翁

ひと夜わが心の森の奥ぶかに
もとほりゆけば四阿屋に黒き影見ゆ。

五月雨の夜の丑満に誰が業ぞ

つくづく見れば妖怪か張子の翁

いろあせく大提灯のそのさまに
観念の顔うちしがめ軒に吊さる。

爛壞せる朱のころものいちめん

優曇華のはなさき匂ひ仄かに啼きぬ。――

雨にゆく車の幌の内部にて

すゝり泣する狂女がいたき聲色。

たちよれば無限に曳ける光芒の

硝子の眼、その底に映るはくら

森の影。池の濁水のにが笑ひ。

見るからに、にくき翁のつらだまし

鬚長顔のその頬に我れは吹きかく

煩累の煙草の煙。かふる時

煙を乗せし數萬の小さき車の

騒立ちに耳そばだつる優曇華は

翁の胸を毛布もてあぐさめかをに

そと撫でつ。さあれ翁は悪水の

沼に浮べる死魚の如、身うごきもせず。

凶時の今宵こそ聞け、わちかたの

心の川の鉄橋をとがろきすぐる

瀛車の音――世の煩累に倦じたる

たぞき流笛の嘆息に、信號柱の灯は

青と赤、心の闇にひらめき狂ふ。

五、腦の血

生汗の灰濁む顔に

せはしげに、めばたくまなこ

人の眼か

はたや我が眼か

日と闇の色を量めく。

あふれもじ。

傭き頭蓋。

れどもなく淀み流るゝ脳液は

盪げし鉛のそのさまに波ゆさぶりて

うちかへす頭骨の壁の痛きかぢ。

かくて倒れし喫煙の酔者の吐息

肋骨は伸びつ、ちぢみつ。

見わたせば

こはまぼろしか

天井の棧のいくすぢ 床の壁

柱も、窓の花罌粟も

量めきめぐる。

苦しみの闇の奥がに

炎に初むる脳の噴火や。――

脳髓の大動脈を血の熔岩ぞ

くるひて走る。

わりくは

ふわくくと

脳膜は顛門うちて

ニコチンの毒氣をぞ吐く。